

# 「春の錦」考

—漢詩表現受容の過程で生じた自然観について—

水谷隆\*

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. 古今和歌集56番の歌の解釋に關して
  3. 「都ぞ春の錦なりける」という表現の背景
  4. 「春の錦」が和歌表現に用いられなかった理由
  5. 素性の歌の感興
  6. 漢詩表現の攝取と古今集和歌の自然観について
  7. おわりに
- 

## 1. はじめに

古今和歌集の特徴の一つとして、四季おりおりの自然の景物をさまざまに描寫する多くの和歌が收められていることが擧げられる。またそれら四季の和歌の表現には日本人の季節感として定着し、現代にまで受け継がれているものさえ、しばしば見られることも周知の事實である。では、なぜ、古今和歌集の和歌には、そのように豊かな自然描寫がなされているのだろうか。もちろんその原因は、一言で説明できるような單純なものとは考えにくい、ただ、その一端にせよ、解明につながるのではないかと思われる例を以下に示して、考察を加えてみたい。

## 2. 古今和歌集56番の歌の解釋に關して

古今和歌集春部(56)に收められた、素性法師の歌、

花ざかりに京を見やりてよめる  
みわたせば柳櫻をこきまぜて宮こぞ春の錦なりける

---

\* 大阪女子短期大學助教授 日本古典文學

は、柳の新緑と櫻の花盛りに彩られた都の美しさをうたったものであるが、第四、五句「都ぞ春の錦なりける」に「ぞ」という係助詞が用いられていることにこだわるところから小論を始めたい。

これは、『古今和歌集評釋（金子元臣）』にも、

紅葉の頃は山を秋の錦と見るは常の事で、古來の歌にその例が頗る多いので、それに對へて「今は山より都の方を見渡して、春の錦は都にこそありけれといふ意を含めたること、都ぞのぞの辭にて知られたり」とある、景樹、廣蔭等の説は、細かに穿った聞方で、よく箇中の消息を解したものである。

と述べられているように、柳と櫻が入り亂れる<sup>1)</sup>都の光景を目にして、「ああ、山の美しい紅葉のことを『秋の錦』というのは知っていたが、それに對して、この都の光景こそが『春の錦』なのだ」と、それまで気づいていなかった「春の錦」を今まさに発見した感興を表現したものと捉えなければならない。

素性法師の歌はそのように解釋されるものであり<sup>2)</sup>、そして同歌は古今和歌集に收められているのだから、當時の人々から高く評価されるものでもあった。このことを言い換えると、素性法師のうたう、「秋の錦」ならぬ「春の錦」を発見したという感興は、當時の人々に理解され、共感されるものであったのである。

さて、そのような、素性の歌の感興が人々に理解されるためには、前提として次のようなことがなければならぬ。すなわち、秋の山の美しさを錦に喩えることは誰もが知っている一般的な表現であり、なおかつ、春の美しい風景を錦に喩えることは、ほとんどの人の意識になかった、ということである。

### 3. 「都ぞ春の錦なりける」という表現の背景

本章では、今述べた、素性法師の歌の「前提」について確認をしておきたい。

はじめに「秋の錦」が、古今和歌集の時代、一般的な表現であったかどうかに関して言えば、

ひぐらしにあきののやまをわけくればこころにもあらぬにしきをぞきる (新撰万葉集11)  
かみなびのみむろのやまをあきゆけばにしきたちきるこちこそすれ

1) 「こきまぜて」については「もぎ落としてまぜる」（古今和歌集全評釋 など、柳と櫻を枝からしごき落としてまぜる、というふう理解する説もあるが、「こきまぜては、もとは手してこきおろすより出たるならめど、しか手してこく物は木葉にまれ、玉にまれ、うち亂るるものなれば、只亂れ合たるをこきまぜといひなれたる也」（古今和歌集正義）のように、「入り亂れる」程度に解すべきであると考えられる。

2) このように解釋して、古今和歌集の諸注釋書にさしたる異論はみえない。

(新撰万葉集141・古今和歌集296 壬生忠岑)

このたびはぬさもとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにまに (古今和歌集420 菅原道眞)

など、新撰万葉集や古今和歌集に類する表現を用いた歌がしばしば見られることから、そのように判断してよいと思われる。同様に、「春の錦」という表現を用いた和歌は、素性以前の平安朝の作には見いだすことができず<sup>3)</sup>、先に想定した「前提」は肯われるものと、まずは考えられる。なお、万葉集にはこの表現を用いた作が一例見られるが、これについては後で言及する。

ただ、先に記した「春の美しい風景を錦に喩えることは、ほとんどの人の意識になかった」ということについては、もう少し説明を加えておく必要がある。というのは、

春至花如錦、夏近葉成帷。 (陳李爽「賦得芳樹詩」より)

桐落秋蛙散、桃舒春錦芳。 (初唐蘇味道「詠井」より)

三月咸陽城、千花晝如錦。 (盛唐李白「月下獨酌」より)

など、古今和歌集の表現に多大な影響を与えたジャンルである漢詩の表現に、春の美しい花を「錦」と喩える表現が数多く見られるからである。さらに付言するならば、このような表現を当時の日本人も愛好していたようで、千載佳句にも

秦城樓閣鶯花裏、漢王山川錦繡中 (盛唐杜甫「清明二首」)

綠羅剪作三春柳、紅錦裁成二月花 (沙門奉蚌<sup>4)</sup>「思故郷」)

などの詩句が掲載され、また、

天霽雲衣落、池明桃錦舒。 (藤原万里「暮春於弟園池置酒」(懷風藻)より)

河陽風土饒春色、一縣千家無不花。吹入江中如濯錦、亂飛機上奪文紗。

(藤原冬繼「河陽花」(文華秀麗集)より)

仙盞追來花錦亂、御簾卷却月鉤新。

(菅原道眞「三月三日、侍於雅院。賜侍臣曲水之飲、應製。」(菅家文章)より)

のように、奈良時代から平安時代にかけて日本人の詩作にも、とぎれなく用いられていることが確認できる。つまり、古今集の當時の人々は、漢詩の表現としての「春の錦」には相当程度親し

3) それ以後も素性の歌の影響を受けた作しか作られていない。

4) 奉蚌の名も作品も中国には伝わらず、全唐詩にも逸文として千載佳句からの引用が収載されるのみである。そのような、いわばマイナーな詩句を千載佳句が残していることは、ひょっとするとこの、春の花を錦と喩える表現への日本人の嗜好をあらわしているのかもしれない。

んでいたのである。

もう一点、考えておきたい。「春の錦」を詠んだ和歌が素性法師以前の平安時代には見いだせないことを述べた際に保留していた、万葉集の歌のことである。当該の歌は、古今和歌集の成立に百五十年あまり先立つ天平十四年の作とおぼしい、

我が大君 神の命の 高しらす ふたぎの宮は ももきもり 山はこだかし 落ちたぎつ 瀬の音も清  
し うぐひすの き鳴く春へは いはほには 山下光り 錦なす 花咲きををり さを鹿の 妻呼ぶ秋は  
あまぎらふ 時雨をいたみ さにつらふ 黄葉散りつつ 八千年に あれつかしつ 天の下 しらしめ  
さむと 百代にも 変るましじき 大宮ところ (巻六1053)

である。この歌は「久邇新京を讃むる歌」との題詞を持ち、新都を言祝ぐ歌として、人々の前で披露されたものと思われる。この歌の「錦なす花咲きををり」は、あたらしい都を賛美するのにふさわしい「斬新な表現」(「万葉集全注」吉井巖)として試みられたものだったのであろう。けれどもこれ以後、素性の歌に至るまで類似の表現が和歌に用いられることはなかった。つまり、この試みは、受け継がれなかったのである。では、なぜ受け継がれなかったのか。先ほど述べたように、「春の錦」という表現そのものは漢詩のそれとして、奈良時代から平安時代までとぎれることなく日本人に愛好されていた。したがって、「錦なす花咲きををり」という表現が、単に印象に残らなかったためとか、忘れ去られたため、という説明では理解が届かないと思われる。つまり、この表現は、何らかの理由で受け入れにくい、すなわち、和歌にはふさわしくないものだったと考えるべきなのではないか。

以上のことから、素性の歌の前提として記した「春の美しい風景を錦に喩えることは、ほとんどの人の意識になかった」は不十分な説明であり、「漢詩で春の美しい風景を錦に喩えるのは周知のことであったが、和歌でそのような表現をすることは、ほとんどの人の思いもよらないものであった」とあらためるべきであると考えられる。

#### 4. 「春の錦」が和歌表現に用いられなかった理由

前章で、「春の錦」という表現が、和歌にはふさわしくないものと考えられていたのではないかと述べた。では、どのような理由で和歌にふさわしくなかったのか。

この問題について考えるために、類似の表現である「秋の錦」を手がかりとしたい。これは、通説では、「江上亦秋色、火雲終不移。巫山猶錦樹、南国且黄鸝。」(杜甫「復愁十二首」の第十)のごとき漢詩表現の影響を受けて和歌に詠まれるようになったものと考えられている。今はそのこと自体に異を唱えるつもりはない。ただ、ここで考えておきたいのは、平安時代より前

の時代には「秋の錦」を和歌に詠んだ例が見いだせない<sup>5)</sup>ことである。無論、万葉集の時代の人々も漢詩の表現は知っていたはずである<sup>6)</sup>。それにもかかわらず、「秋の錦」という表現が和歌に用いられないのは、「春の錦」と同様、単にそれを思いつかなかったのではなく、何らかの理由で和歌に用いにくかったためと考えるべきだろう。つまり、花にせよ紅葉<sup>7)</sup>にせよ、それを錦と喩えることには、何らかの障害があったわけである。

その障害の原因を、本稿では漢語の「錦」と和語の「にしき」との意味の違いに求めてみたいと思う。(なお、以後の考察では便宜として漢語を「錦」、和語を「にしき」と記して区別する。)

漢語の「錦」は、金銀の糸や様々な色糸を織り込んだ美しい模様の織物を意味するだけではなく、「錦雲」(顧況「初秋蓮塘歸」等)、「錦虹」(曹植「盤石篇」等)、「錦瑟」(李商隱「錦瑟詩」等)など、「うつくしい」というほどの、織物という具体性を捨象した意味で用いられることがある。本稿で問題としている花や紅葉も、もちろん織物ではないのだが、「錦」の語がこのような抽象的な意味で用いられるが故に、漢詩では「錦」と喩え得たというわけである。先に引用した藤原万里の「池明桃錦舒(池明らかにして桃錦舒く)」を例にとってみても、この「錦」は池の畔に咲いた桃の花の美しさを言い表したものであって、桃の花がいろとりどりであたたかも織物の錦のようである、というわけでは、やはり、あるまい。

それに對して和語の「にしき」はどうであろうか。ここで、前章で引用した、古今集の時代までの、「秋の錦」を詠んだ歌を再掲する。

ひぐらしにあきののやまをわけくればこころにもあらぬにしきをぞきる  
かみなびのみむろのやまをあきゆけばにしきたちきるこちこそすれ  
このたびはぬさもとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにまに

5) 検討に値する例としては、万葉集所載の天津皇子の歌「たてもなくぬきも定めずをとめらがおるもみちばに霜な降りそね」(巻八1512)、一首が挙げられる。これは、同じ作者の「山機霜杼織葉錦」(「述志」懷風藻)という詩句を併せ考えると、もみじの錦を意図して詠まれたものとも考えられる。しかしながら、この歌を受け取る側からみるとどうなのか。他に同様の表現を用いた和歌がなく、「にしき」という語も用いられていないのだから、一首を、「にしき」を詠んだ歌と受け取る必然はない。ゆえに単に緯糸と経糸を用いて織り上げたもの、としか考えなかったのではないか。実際たとえば、「み吉野のあをねかたけの苔むしろたれかおりけむたてぬきなしに」(万葉集巻七1120)は、天津皇子の歌に影響を受けた作とおぼしいが、この歌では「筵」の表現に緯糸と経糸を用いている。

6) 注5に記した天津皇子の詩句のごとく、万葉集時代の日本人の作にもこの表現は用いられている。

7) 周知のように万葉集ではもみじを「黄葉」と表記し、平安時代になると「紅葉」と表記するようになる。この表記の違いは本稿の趣旨に大きな影響を与えるとは考えないので現代日本語で通行の表記である「紅葉」と記しておく。なお、「もみじ」の表記の変化と相俟ってそのイメージも「黄」主体のものから「紅」主体のものへと変化したかと思われる。その変化を、より一層鮮やかな色への変化と見て、豪華な織物である錦に喩える發想を誘引した要素と考える意見もある。(武庫川女子大學大學院 金玉京氏直詩 考慮に値する見解と思われるが、今はそれを検証するだけの準備がない。ただ、仮にそのようなことがあったとしても本稿の論旨そのものに変更の要はないものとする。

初めの歌は「にしきを着る」とあり、明らかに織物の錦がイメージされている。2番目は「にしき裁ち着る」と、やはり織物である「にしき」を裁断して着物に仕立てて身につけるといことが歌われている。最後の「このたびは」の歌は、木綿や麻などで作る「幣」の代わりにこの美しい紅葉の「にしき」を神に手向けます、という内容の歌であり、いずれの歌の「にしき」も、織物としてははっきりと意識されていることがわかる。さらに念のために、古今和歌集で「にしき」が詠まれた残りの歌を全て示してみよう。

たがための錦なればか秋ぎりのさほの山辺をたちかくすらむ	(265紀友則)
龍田河もみちみだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ	(283讀み人知らず)
霜のたてつゆのぬきこそよわからし山の錦のおればかつちる	(291藤原關雄)
見る人もなくてちりぬるおく山の紅葉はよるのにしきなりけり	(297紀貫之)
龍田河錦おりかく神な月しぐれの雨をたてぬきにして	(314讀み人知らず)

一首目の紀友則の歌は、にしきを「裁つ」と霧が「立つ」の掛詞を用いたものである。二首目は龍田川を織物である「にしき」に喩えて、川を渡ることによって美しい「にしき」の真ん中が裁ち切られてしまう様を幻想したものである。三首目と五首目はともに山や川の「にしき」が経糸と緯糸を用いて織りなされたものとの考えをあらわしている。四首目の紀貫之の歌は、有名な漢書項羽伝の「富貴不歸故郷、如衣錦夜行。」をそのまま利用したものであり、「夜のにしき」とは、織物である「にしき」を身にまとい夜歩く、という意味である。やはりいずれの歌も「にしき」が織物であることをはっきりと意識した表現になっていることが確認できよう。すなわち、「にしき」は、あくまでも織物を意味することばとして認識されていた<sup>8)</sup>のであり、抽象的な「うつくしい」という意味で用いられることはなかったらしい<sup>9)</sup>。このことから本稿では、和語「にしき」でもって織物ならぬ花や紅葉を喩えることには、一定のそぐわなさが感じられたものと推定するのである。そのため万葉集では、「春の錦」も「秋の錦」も、漢詩表現としては周知のものでありながら、歌に詠むという着想がほとんど生まれなかったのではないか。

さて、そのような状況が万葉集までの時代にあったとして、ではなぜ、平安時代にいたって秋山の紅葉を「にしき」と喩える表現が突然に多く用いられるようになったのか。端的に言ってしまうと、それは、ある誰かが、紅葉した木々で覆われた山や、色とりどりの紅葉が流れていく川のことを

霜のたてつゆのぬきこそよわからし山の錦のおればかつちる  
龍田河錦おりかく神な月しぐれの雨をたてぬきにして

8) 古今集以外の和歌、また散文の作品でも「にしき」の語は織物を意味するものとしての用法しか確認できない。

9) このことは現代日本語でも同様に考えられる。やや抽象化された用法として「錦鯉」や「錦蛇」などがあるが、それもそれらの色彩豊かな姿が、織物としての「にしき」を直接に連想させるからそのように言うのであろう。

などのように、美しく織りなされたものと見立てて<sup>10)</sup>、それを「にしき」のようだと表現し、そしてその表現が廣く受け入れられた<sup>11)</sup>から、という他はない。そのような過程を経てはじめて、紅葉という、織物ではない景物が「にしき」と喩えられるようになったのであろう。それに對して、春の花に關しては織りなされたものという見立ては成立しなかったらしく、現にそのような見立て表現を用いた例は見いだせない。そのため紅葉のように「にしき」に喩えられることがなかったのではないか。仮に、そのように考えないのであれば、つまり、「にしき」の語の担う意味が擴大して織物でないものにも用いられるようになったことが、紅葉を「にしき」と喩える表現がこの時代一氣に廣まった原因だ、というのであれば、平安時代の和歌でもっぱら紅葉が「にしき」に喩えられ、花の方は（素性の歌とその影響下にある歌を除いて）そうされることがない、という現状の説明ができなくなる。たとえば全唐詩を一覽しても「春の錦」という表現を用いた詩に比べて「秋の錦」を用いたものは、相當に少ない。千載佳句でも「春の錦」が四例見いだせるのに對して「秋の錦」は一例もない。このように漢詩の世界では、日本人も含めて、秋の紅葉の錦よりも春の花の錦の方をより愛好していたらしい。にもかかわらず、和歌では紅葉の方ばかりが「にしき」と喩えられ、花が喩えられないのは、何らかの障害、具体的に言えば、春の花を織物に見立てることは難しい、ということがあったためと考えるべきであろう。

## 5. 素性の歌の感興

3、4 章で述べたことをまとめてみよう。

- ・漢詩には紅葉も花も「錦」と喩える表現があり、はやくから日本人もよく知り、詩作にもしばしば用いていた。
- ・ただし、漢語「錦」と和語「にしき」の意味の違いのため、万葉集までは、和歌の詠作にこの表現はほとんど用いられなかった。
- ・それが、平安時代になって、山川の紅葉を織物に見立てる發想が普及し、同時に紅葉を「にしき」と喩える和歌が多く詠まれた。
- ・一方、花の方は織物に見立てられなかったので、平安時代にいたっても「にしき」に喩えられることがなかった。

10) 筆者はこのような見立ての淵源として注5に引用した大津皇子の歌があったものと考えている。ただし、平安時代の人々が大津皇子の歌を直接に知っていて、それにまなんだものなのかどうかはわからない。

11) そのような見立てが受け入れられた背景には、あるいは、この時代の屏風歌の流行があったのかも知れない。つまり、現實の秋の山を見て「にしき」だと受け取るのには、イメージのいわば飛躍が必要と思われるのであるが、これが、屏風に様々な彩色で描かれた繪の場合、飛躍の度合いは少なくてすむ。そのようなそうした屏風の繪柄が一般化したときには、紅葉の山を「にしき」と喩える表現もさほどの抵抗感無しに受け入れられるのではないか。

こうしたな状況のもとで詠まれたのが、素性法師の

花ざかりに京を見やりてよめる  
みわたせば柳櫻をこきませで宮こそ春の錦なりける

という歌なのである。

この時代、「秋の錦」は相当盛んに歌に詠まれていた。また、それが漢詩に由来する表現であるのも周知のことだったろう。ならば漢詩で「秋の錦」以上に愛好されていた「春の錦」も当然、歌人たちの脳裏には浮かんでいた筈である。「春の錦」も和歌に詠めないだろうか、と。けれども、和語「にしき」の意味範疇のために和歌に用いることはむずかしい。そんなとき、素性法師が、柳と櫻の入り交じった都を遠くから眺めて、あるいはそのような映像をイメージして<sup>12)</sup>、それがあたたかも織物のごとく見えることに気づいたのか。あるいは、常套的に「糸」と喩えられる<sup>13)</sup>柳と取り合わせることで、織物へと連想が繋がったのか。いずれにしても春の都こそが美しい織物、すなわち「にしき」に喩えうるものであることを発見したのである。その発見こそが素性の手柄だったと思われる。

かくして、本稿では、はじめ、この歌の第四、五句「都ぞ春の錦なりける」を、「それまで気づいていなかった『春の錦』を今まさに発見した感興を表現したもの」と述べたが、その「感興」とは「漢詩にしばしばみられる『春の錦』というものを、今まで和語の表現としては見ていなかったが、この柳の新緑と花盛りの櫻の色とが入り交じった美しい都を見渡したときに、これこそが、和語でうたいあげべき『春の錦』であると気づいたよ」という内實を持ったものだったのではないかと、あらためて提示する。

## 6. 漢詩表現の攝取と古今集和歌の自然観について

ここまで、古今和歌集56番の歌が、それまで利用しにくかった漢詩表現を、あらたな視点を発見することで和歌に用いたものであったことを述べてきた。これを別の側面から見れば、「春の錦」という漢詩の表現を和歌に持ち込もうとする過程の中で、柳と櫻の二つの色が入り交じった美しい都の遠景という、それまで気づくことのなかった新しい風景を見いだしたというこ

12) 歌に詠まれた風景が現実のものとは限らないというのは、この時代の常である。素性のこの歌も想像世界のイメージを詠んだものとしたほうがよいかとは思ふ。

13) 当該の歌を除き、古今和歌集で「柳」の詠みこまれた歌を列挙すると「あをやぎのいとよりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける」(26)「あさみどりいとよりかけてしらつゆをたまにもぬける春の柳か」(27)「あをやぎをかたいとによりて鶯のぬふてふ笠は梅の花がさ」(1081)とある通りである。

ともである。このように、漢詩の表現を和文に取り込む過程で、新しい風景や自然を見いだすという営みは、素性の歌以外にも古今和歌集にしばしば見られる。次はそうした例を示しておく。古今集春部（255）の歌である。

貞観御時、綾綺殿のまへに梅の木ありけり、にしの方にさせりけるえだのみみちはじめたり  
けるをうへにさぶらふをのこどものよみけるついでによめる 藤原かちおむ  
おなじえをわきてこのはのうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ

中國の五行説では、たとえば、礼記月令に「立秋之日、天子親帥三公・九卿・諸侯・大夫、以迎秋於西郊…」と記されているように、秋は西方からやってくるものとされる。そして、この「同じ枝を」の歌は、こうした思想をふまえて詠まれたものと目されている。

さて、この歌の詞書きによれば、ある日殿上人たちが綾綺殿の前の梅の木の西方の枝が色づき始めていることを歌に詠みあったという。ここで考えたいのは、このような出来事があるためには、梅の木の西側の枝が色づき始めたことに気づいた人がおり、それをおもしろがる人々がいなければならない、ということである。何の前提もなしに梅の木を見るのであれば、色づき始めた枝がどの方角に位置するものなのかということに意が拂われることはないだろう。そうではなくて、礼記などの記述を記憶している人にして初めて、西の枝が色づいたことに敏感に反応するのである。また周囲の人々も五行説を熟知しているからこそこの現象をおもしろがり、興に乗って和歌を詠み合う、ということが生じたわけである。

もう一つ、別の条件についても確認しておきたい。それは、当時の日本の都である山城の地では「秋が西からやってくる」ということに合致する自然現象はなかなかありにくいということである。たとえば紅葉にしても、都から見て東方に位置する比叡山や伊吹山、あるいは北山の方から始まるものであろう。そうすると「秋は西から」という五行説の知識は、今述べたように、當時の人々にごく親しいものではあっても、これを、都の自然を描寫する和歌の表現として用いるのは難しかっただろうことが容易に想像できる。だからこそ、西側の枝が色づき始めた梅の木を見て、居合わせた人々の興味はいっそう高まったのではないか。

こうして詠まれた藤原勝臣の歌は、結局のところ次のような感興の込められたものだったと考えられる。すなわち、「同じ枝なのに、區別して（西方の）木の葉が色づくのは…（ああ、これが漢籍に言う）西こそ秋の初め（ということ）なのだなあ」と。

このようにして古今集の和歌は、紅葉はどちらの方角からはじまるのかという新しい自然観察のありかたを、漢籍の表現をきっかけとして、手に入れたわけである。

以下もう少し、同様の例を簡単に挙げておく。

たとえば、古今和歌集巻頭第2首目の紀貫之の歌、

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

は、礼記月令の「孟春之月…東風解凍」という表現に基づいたものである。勅撰集たる古今和歌集の春部を飾るために、律令制を支える理念である儒教の考えを歌い上げるべく、貫之が作り上げた歌であるらしい。

さて、この歌以前に、春になって氷が溶けるという内容を記したものは、散文・韻文を問わず日本の作品には見いだすことができない。なんとすれば、「冬も、氷したるあしたなどはいふべきにもあらず。」(枕草子328段)という記述が示すように、当時の都では冬でも氷の張らない朝があった。つまり冬の間氷が張ったままではなかったからである。したがって、春になって氷が溶けるという発想は、通常自然観察からでは生まれ難い。それが、礼記という漢籍の表現を和歌に持ち込もうとする作業の結果として、春になって氷が溶ける、という自然観が和歌に詠まれることになった<sup>14)</sup>。

またたとえば、古今秋部卷頭(169)の、

あききぬめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる

も先の歌と同様、礼記月令の記述「孟秋之月…涼風至」をふまえていることもあって、勅撰集の秋部冒頭に配された作と思われる<sup>15)</sup>。これも、立秋の日、すなわち旧暦の7月頃にはまだまだ暑いことが通例である日本の自然を観察するだけでは生まれにくい表現だろう。つまり漢籍の表現を和歌に詠むことで生じた、新しい自然観と言えるのではないか。

以上、素性法師の歌をきっかけにして、日本の自然やことばとはそぐわないところのある、しかし、いろいろな意味で魅力的な漢籍の表現を和歌に取り込もうとする過程の中で、それまでの日本人が気づいていなかった自然観が生じた例を見てきた。

古今和歌集の時代、漢詩の表現を積極的にまなび、取り入れようとする志向が強いものであったことは、通説の通りと考えられる。そのような状況のもと、今見たような、漢詩表現の攝取がきっかけとなった、新しい自然観や表現も、多数生みだされたものと想像される。そうしたところの積み重ねも、古今和歌集の豊かな自然描寫を形成する一原動力だったのではないだろうか。

14) 詳細は拙稿「日本古代の文學が中國文學から受け入れたものの行方」(日本文化學報第14輯)を参照されたい。

15) 拙稿「新撰和歌注釋原稿(二)」大阪女子短期大學紀要第25号(大阪女子短期大學 2000.12) 當該歌の項に概略を記した。

## 7. おわりに

ここまで、古今和歌集の時代に様々な自然描写が試みられたことの一様相について見てきたが、こうした考察は、単に古今和歌集の表現の特性を理解するためだけにとどまるべきものではないと思う。

周知のように、古今和歌集は平安時代以後、明治時代を迎えるまで、権威ある古典として重視されてきた。そして和歌のみならず、散文にも盛んに引用され、またその他の分野の芸術の典拠ともなり、日本人のいわば教養の一源泉たり続けた。そのため、これも周知のことであるが、古今集に描かれた美意識がそのまま日本の文化として生き続けている例も多い。日本文化の特質の一つとして、しばしば取りざたされる、細やかな季節感も、その一定の部分は古今和歌集で作上げられた表現に基づいている。つまり、古今和歌集は日本文化の一つの基層をなしているのである。であるから、本稿も、大仰なことを言えば、日本文化の特質のひとつである細やかな自然観が形成された過程の解明につながることをも期している。

### 付記

本研究は、「關西圏の人間文化についての総合的研究—文化形成のモチベーション—プロジェクト研究」（武庫川女子大学）における課題研究「關西の氣候風土と古典文學」研究の成果の一部である。

### 【参考文献】

- ・竹岡正夫(1976),『古今和歌集全評釋』上,右文書院p.357-362
- ・吉井巖(1984),『万葉集全注 卷第六』,有斐閣p.288

## 要 旨

漢詩にしばしば用いられる、春の花を「錦」と喩える表現は、古今和歌集の時代の日本人も愛好していたものであった。しかし、漢語「錦」が「美しい」という程度の意味でも用いられるのに對して、和語「にしき」があくまで織物を示すために、和歌で花を「にしき」と言うことはなかった。一方、これも漢詩由來の表現である、紅葉を錦と喩える表現は、平安時代にいたり、紅葉を織物と見立てることが一般化したのに伴って、廣く歌に詠まれるようになった。そうした状況の中、素性法師が、春の都の柳と櫻の入り交じった遠景ならば織物に見立てられることに気づき、「みわたせば柳櫻をこきまぜてみやごぞ春の錦なりける」という歌を詠んだ。このことを、逆の面から説明すれば、漢詩の表現を和歌に取り込もうとする營爲が、それまで気づかなかった自然を發見させた、ということになる。こうした、漢詩表現を和歌に取り込む過程の中で、古今集の歌人たちは、自然を見る目、自然觀を擴大していった。

その後、古今和歌集が日本文化の一基層となった。ならば、上記の營みは日本文化の自然觀を作り上げた一要素ともなっているといえるのではないか。

キーワード：古今56番歌の解釋 漢詩表現の受容 紅葉の錦 春の錦 自然觀の形成  
日本文化の基層

투 고 : 2005. 11. 30

1차 심사 : 2005. 12. 10

2차 심사 : 2005. 12. 31

住 所 : 大阪市城東區森之宮2-8-512

電 話 : 06-6969-6964

e-mail : mizutani.takashi@nifty.ne.jp